OTOGAWA GRAND DESIGN Log.6

Vol.6

愛知県岡崎市の乙川リバーフロント地区では、2015年から主要回遊動線「QURUWA(くるわ)」を中心に、豊富な公共空間を活用した複数の社会実験を通して、公民連携プロジェクトを立ち上げ、「QURUWA戦略」としてエリアの再生に取り組んでいます。

QURUWA

自分たちのまちができるまで

暮らしを豊かにするまちの使い方とは

乙川リバーフロント地区のまちづくり4年目の取り組みを収録。

CONTENTS

02 PROJECT SUMMARY 2018年度乙川リバーフロント地区のまちづくり
03 SYMPOSIUM 暮らしを豊かにするまちの使い方最前線
04 SOCIAL EXPERIMENT 康生通り「グッとくるわ社会実験」
06 SOCIAL EXPERIMENT 連尺通り「生活社会実験」
08 SOCIAL EXPERIMENT おとがワーンダーランド 岡崎泰平の祈り
10 SYMPOSIUM 動き出した、QURUWA
13 WORKSHOP 龍田公園の使い方や関わり方を考えるワークショップ
14 REPORT 橋の名称と通りの愛称公募 リノベーションまちづくり
15 CONFERENCE デザイン会議

プロジェクトサマリー

2018年度 乙川リバーフロント地区のまちづくり

「おとがわプロジェクト」の3年間の成果として策定された『QURUWA戦略』を受け、おとがわプロジェクト4年目となる2018年度は、実際に公民連携プロジェクトが動き出す年となりました。本紙では、QURUWA戦略に定められた7つのQURUWAプロジェクトのうち、2018年度の主な動きをお届けします。

2017年度に策定されたQURUWA戦略は、7つのQURUWAプロジェクト（以下、「QP」）を実施することによって、回遊性を高め、波及効果として、暮らしの質やエリアの価値を向上する、まちの活性化を図る戦略です（Log.5｜P.03-05参照）。

QURUWAエリアでは現在、籠田公園や東岡崎駅北東街区、ペデストリアンデッキなど、QURUWA上で新しい拠点の整備が進んでいますが、ハード整備だけでまちが活性化したり、暮らしが豊かになるという訳ではありません。とりわけ、回遊性を高めるためには、拠点間を結ぶ「公園」「道路」や「河川」をいかに使いこなすかが問われます。

「河川」については、2016年度より国の「かわまちづくり支援制度」を活用して、乙川では様々な使い方が試されてきています（❶QP-4乙川かわまちづくり事業）。

「道路」については、これまで車を中心に整備されていたものを、人のために作りなおしたり、使い方のルールを見なおしたりする「ストリートデザイン」の実践が国内外で注目されています。

2018年度の新たな動きとして特筆すべきは、康生通り、連尺通りにおいて「道路」の使い方を検証する社会実験（❷QP-7道路再構築事業）でした。

9月のQURUWAシンポジウム「暮らしを豊かにするまちの使い方最前線」[→→P.03]では、国内外の道路活用に詳しい専門家と、道路の活用を推進している国土交通省都市局まちづくり推進課の担当者を迎え、ストリートデザインの必要性やその効果、道路空間活用の実践を後押しする規制緩和等の支援メニューについて学びました。

これを受けて、10月から11月にかけて、康生通りでは株式会社まちづくり岡崎が、連尺通りではNPO法人岡崎まち育てセンター・りたがそれぞれ実施主体となり、社会実験が行われました。

康生通りの「グッとくるわ社会実験」[→→P.04]では、『まち歩きが楽しいまち』を目指した歩道空間（軒先）の活用と、『魅力ある来やすいまち』の実現に向けた駐車場の使い方の模索を検証項目に設定し、一定の有効性が認められました。

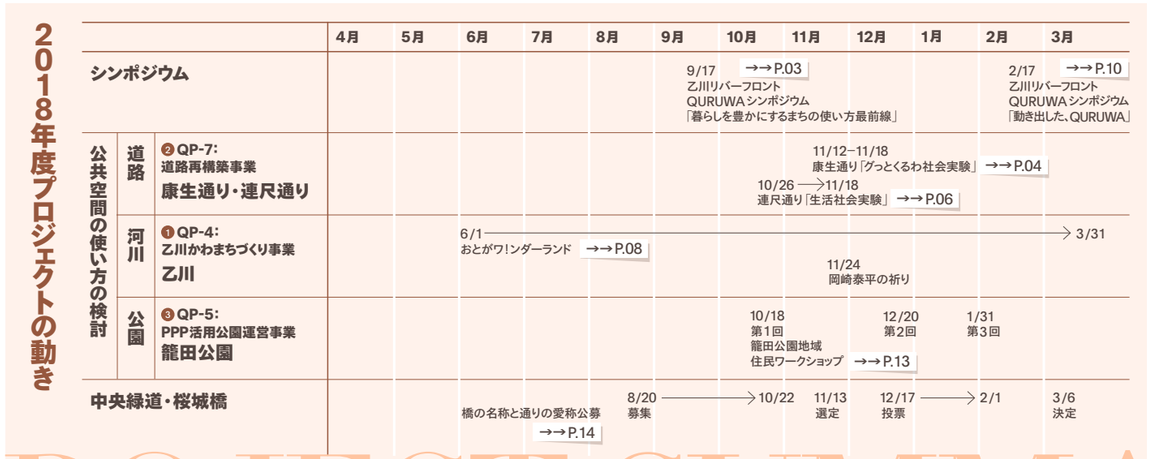
連尺通りの「生活社会実験」[→→P.06]では、軒先の歩道空間の使い方を地元の住民や商店主らと共に試行錯誤する中で、道路を使いこなすことで生まれる豊かな暮らしの可能性を確かめることができました。

また、10月から1月にかけては、地域住民を対象としてリニューアルを予定している籠田公園の使い方や管理への関わり方を話し合うワークショップ[→→P.13]が開催されました（❸QP-5PPP活用公園運営事業（籠田公園））。そこで出された意見を元に、学区の垣根を超えた町内合同の盆踊りや定期的な清掃活動などがリニューアル後に実行に移される予定です。

3年目となるおとがワ!ンダーランド[→→P.08]は、2年間の活用実績を経て、その場所ならでは、その季節や時間ならではの使い方が見出されてきました。また、乙川エリアの将来像を行政と民間で共有する指針となる「おとがわエリアビジョン（QURUWA戦略における乙川エリアの詳細ビジョン）」が定められ、公民合わせて24のプロジェクトが名を連ねました。

乙川にかかる人道橋の名称と、人道橋から籠田公園までの通りの愛称の公募[→→P.14]には、「橋の名称」に4,004件、「通りの愛称」に3,834件もの応募がありました。その中から、市内の中学生が中心となった選定委員会により5点ずつに絞られ、それぞれ7,000票を超える市民投票を経て、「桜城橋」、「天下の道」に決定しました。

2月には、QURUWA戦略1年目を総括し、ハード整備が完了予定となる翌年度を見据え、これからのQURUWAの動きを展望するシンポジウム「動き出した、QURUWA」[→→P.10]が開催されました。QURUWAで起こっている大小さまざまな公民連携プロジェクトや、名古屋市栄ミナミ地区のストリートデザインの実践例などを踏まえ、今後公民連携まちづくりを牽引する都市再生推進法人に期待される役割や、公共空間の活用を観察し、使う人を啓発し、その場所ならではの魅力を引き出す「丁寧な世話人」の必要性、これから市民、企業が「都市経営」の意識を持って取り組みを積み重ねていくことの重要性などが指摘されました。



乙川リバーフロント QURUWAシンポジウム

暮らしを豊かにするまちの使い方最前線

主要回遊動線「QURUWA」の回遊性を高めるには、歩いて楽しい街路空間づくり（ストリートデザイン）が欠かせません。康生通り、連尺通りの社会実験実施に先立ち、ストリートデザインの事例に詳しい専門家、公民連携による地方再生を推奨する国土交通省担当者、そしてQURUWAのまちづくりのアドバイザーの方々をパネリストに迎え、道路や駐車場の活用についてイメージをふくらませました。

パネリスト

三浦詩乃｜Shino Miura
横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院助教

橋口真依｜Mai Hashiguchi
国土交通省都市局まちづくり推進課官民連携推進室課長補佐

西村浩｜Hiroshi Nishimura
乙川リバーフロント地区 まちづくりデザインアドバイザー／建築家／株式会社ワークヴィジョンズ代表取締役／株式会社リノベリングパートナー

モデレーター

藤村龍至｜Ryuji Fujimura
おとがわプロジェクト デザインコーディネーター／建築家／東京藝術大学美術学部建築科准教授／RFA主宰／乙川リバーフロント地区 まちづくりデザインアドバイザー

日時：2018年9月17日［月・祝］14:00-16:00
会場：岡崎市図書館交流プラザ りぶらホール

三浦詩乃氏

橋口真依氏

西村浩氏

藤村龍至氏

道路を「交通・物流」のための空間から、「人」のための空間へ

三浦｜現在国内外の都市で、ストリートデザインを魅力的に変えていく取り組みが行われています。それを実現するには、①社会実験や実際の交通データなどから通行以外の空間の使い方やニーズを発掘する、②ニーズを実現するハード整備を行う、③ハード整備を活かして、自分たちの居場所として使いこなす、という3つのステップを踏むことが大切です。ニューヨークでは、タイムズスクエアを歩行者空間化する社会実験の効果が評価され、10年間で70か所が生まれ変わりました。実際に交通が円滑になり、沿道の経済効果が高まり、エリアの魅力やコミュニティの結束力が向上するなど多面的な効果が示されています。道路だけでなく、両側の建物も一緒に魅力的にしていくことも大切です。

籠田公園とシビコをつなぐ3本の通りの役割

西村｜QURUWAの拠点である籠田公園とシビコを、3つの個性的な通りで強力に結びつけるために、それぞれの役割を決めて今後の道づくりを考えていけるとよいと思います。

二七市通りは、定期的に市が開かれるローカルな文化を大切にしながら安全で快適な通りに、連尺通りは旧東海道としての歴史とリノベーションまちづくりによる新しい動きが混ざり合って、建物の中で行われている活動がにじみ出ているような雰囲気になるとよいのではないかと思っています。康生通りは、車やバスのアクセスの玄関口として、車道を狭めて車の乗降や商店の利便性を高めるスペースとして使うなど、車道と歩道の使い方を考えていけるとよいのではないでしょうか。

軒下1mを帯状の広場に

西村｜道路は道路法、道路交通法、建築基準法などの法律で定義され、法律上の使われ方のルール・制約があり、道路を占用して使用するには管理者や警察に許可を取らないといけなくて、使うハードルが高い。例えば、歩道の法的に必要な幅員を確保した上で、残った軒先の空間を道路から除外して帯状の広場にすれば、煩雑な手続きが必要なくなる。こうしたスペースを地域できちんとルールをつくって使っていったり、魅力的なにじみ出しをマネジメントしながら収益をあげて持続的に運営することができると、道路という空間の魅力向上の可能性が広がっていくと思っています。

「民」の力を活かしエリア再生を後押しする支援制度

橋口｜国交省では「コンパクトシティ＋ネットワーク」で都市機能や居住の密度を高めつつ、同時に空き家・空き地の増加によって「スポンジ化」するまちなかへの対策を進め、官民連携による地方都市の再生を推進しています。具体的には法律改正（都市再生特別措置法）を行い、例えば、隣り合う駐車場を共同化して、通路が一本化されることで駐車台数を担保しつつ生まれる余剰スペースを店舗などに活用し、収益性と賑わいを生むまちの魅力を両立させる「コモンズ協定」という制度をつくりました。また、行政がまちづくりのパートナーとして民間団体を指定する「都市再生推進法人」の取組みも全国に広がっています。こうした地域で活躍する民間のまちづくり団体が、対外的な信用や行政の支援が得やすくなることで、「生活者」「商業者」「来街者」の三方良しを実現するまちのコーディネーターとしての役割を担ってくれることを期待しています。

まちの魅力を高める駐車場経営の具体策とは

西村｜地方都市ではまちなかで駐車場が虫食い状に増え続けています。駐車場経営で収益を上げているまちづくり会社も多いですが、これから人口減少も進み、自動運転が実現したりすると、駐車場のニーズは確実に減っていきます。一般的に駐車場ばかりのまちは、エリアの魅力も失われ、地価が下がるという結果になります。これからは、エリア価値を上げるような駐車場経営を実践することが求められます。例えば、今バラバラに管理されている駐車場を共同化して、表通りに面したところをお店だったり農園なんかにして、車のアクセスは裏側からにする。そうすることで歩行者にやさしくまちも魅力的になって、子育て世代が行きやすく、暮らしやすい、安全性と車のアクセス性を両立する、ということが可能になるのではないでしょうか。こういうことを実現するには、駐車場と公共空間をセットにしてエリアの価値を高めることを目的として事業を行う家守的な担い手が必要で、都市再生推進法人はそうした役割が果たせると良いと思います。

藤村｜三浦さんから国内外のストリートデザインの事例を、橋口さんから地方再生に向けた国の動きをご紹介いただき、西村さんから道路や駐車場活用の具体的なイメージをお話いただきました。収益を上げるとか稼ぐというのは取り組みを持続させるうえで必要ですが、景観の良さや歴史の継承などもひっくるめて日常的な暮らしの質を高めることが大切で、それによってエリアの価値が高まり、結果収益に結びつく、という流れを大切にしていきたいと感じました。

PROJECT SUMMARY / SYMPOSIUM

社会実験

康生通り「グッとくるわ社会実験」

康生通りでは、株式会社まちづくり岡崎が実施主体となり、『まち歩きが楽しいまち』を目指した歩道空間（軒先）の活用と、『魅力ある来やすいまち』の実現に向けた空地・駐車場の使い方の検証を目的として、康生通り約300mの歩道を活用して社会実験「グッとくるわ社会実験」を行いました。

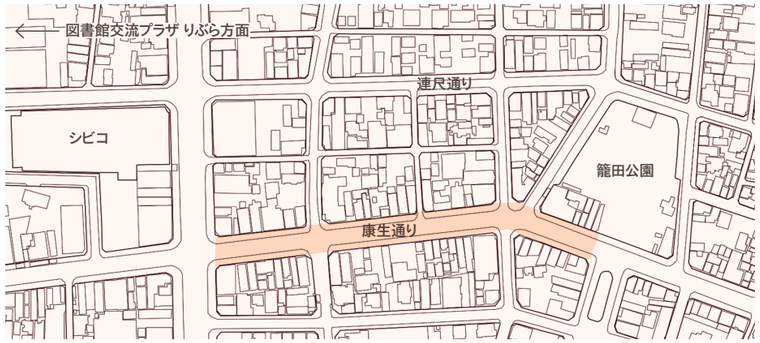
期間：2018年11月12日［月］–11月18日［日］／9時–18時
グッとくるマーケット：11月17日［土］–11月18日［日］／11時–16時
総出店数：92出店
沿道参加店：30店
場所：康生通り
主催：岡崎市乙川リバーフロント推進課
企画・運営：株式会社まちづくり岡崎

「エリアの玄関口」康生通り

「図書館交流プラザ りぶら」と「籠田公園」という2つの拠点を結ぶ東西の動線のうち、康生通りはエリアの玄関口として車やバスでアクセスしやすく、商店街のにぎわいづくりのために歩いて楽しい通りとなることを目指しています。そのため、「まち歩きが楽しいまち」と「魅力ある来やすいまち」の2つをテーマに掲げて道路空間を活用する社会実験を行いました。

商店街ならではの歩道の使い方

「まち歩きが楽しいまち」を実現するために、商店街の建物の軒先1mの歩道空間を、体験ブースや店頭販売など店舗の利便性を高めるために使う［軒先活用］と、来街者が滞留できる休憩スペースやイートインスペースのような［まちの縁側］としての使い方を試し、運営側の評価を中心にその効果を検証しました。実際に体験ブースや販売を行った実施者へのアンケートからは、歩道空間を活用することでコミュニケーションが増えたり歩く楽しみが感じられるなど、まちの魅力が高まることが評価され、8割以上が歩道空間を使うことを肯定しています。また、来街者も軒先活用やまちの縁側的な使い方を評価する人が過半数を占めました。



実施エリアについて｜康生通り約300mの歩道を活用して社会実験を行いました。

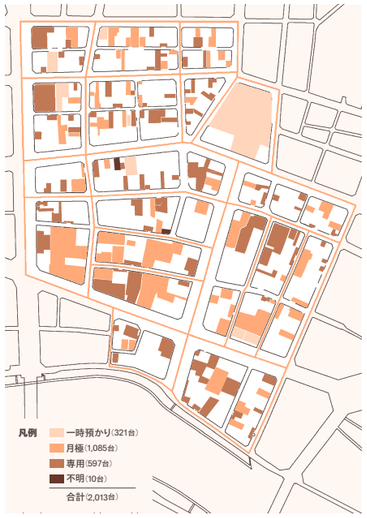
お店の駐車場をまちの共同駐車場に

康生は駐車場が少ないと思われがちですが、実は2,000台以上の駐車場が存在します。ただし、その多くは月極や専用駐車場のため、来街者が使える状態にないというのが実情でした。しかし、昨今では休業日や夜間など、使われていない時間帯に専用駐車場を貸し出すタイムシェアや、隣接しながらも区切られている駐車場を共同化して生まれた余剰空間を店舗等に活用する事例など、駐車場の新たな有効活用のアイディアが実用化されています。そこで今回の社会実験では、今後の康生エリアの駐車場活用の可能性を模索することを目的として、期間中の週末にいくつかの店舗の専用駐車場をまちの共同駐車場として利用することの効果を確かめました。

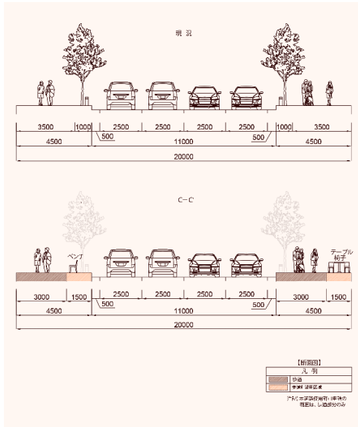
来街者アンケートによると、まちの共同駐車場があることで「康生通りに行きやすい」と感じる人が8割以上を占め、その有効性が実証されたと言えます。お店の駐車場を共同化することで、その店舗以外の場所に行くことが可能になるため、結果としてまちの回遊性の向上に寄与することを評価する声もありました。

まちの魅力を高める道路活用の日常化に向けて

今回の社会実験を通じて、歩道空間を店舗のにじみ出しや来街者の憩いのスペースとして活用することでまちの魅力が高まることが実証されました。次のステップとして、車道も含めた道路空間の適切な使い方や道路の形状の見直しも見据えたストリートデザインを検討していくことになります。また、一時的な社会実験ではなく、日常的に道路を占用して活用することを目指して、民間主体の道路占用が円滑に行えるようになる「都市再生推進法人」の立ち上げも予定されています。まちの魅力向上を目指し、引き続き取り組んでいきます。



駐車場の調査結果



康生通り社会実験横断図
［上：現況｜下：ストリートデザイン素案（道路空間再配分）］

軒先に出現した体験ブース

通りがかりの人とコミュニケーションが生まれる休憩スペース

試験的にまちの駐車場として開放されたお店の駐車場

活動が通りににじみ出ることでまちの風景に活気が生まれる

交番横のキッチンカーエリア

空き地と歩道を一体的に使った販売ブース

軒先の看板や展示に足を止める人も

路上に設置された体験ブース

空きスペースを活用した飲食・物販エリア

SOCIAL EXPERIMENT

社会実験

連尺通り「生活社会実験」

旧東海道の二十七曲りが通る連尺通りは、歴史ある老舗の店舗が並ぶ一方で住宅も増えてきています。近年では、古い建物をリノベーションした店舗もでき始めています[→P.14]**。今年度は、籠田公園に接する交差点から70mの街区にて、新・旧と住・商が混ざり合う連尺通りの日常の暮らしの延長で歩道を活用する「生活社会実験」が行われました。**

期間：2018年10月26日[金]–11月18日[日]／
10時–19時
場所：連尺通り3丁目付近
主催・運営：NPO法人岡崎まち育てセンター・りた
協力：連尺通発展会、株式会社三河家守舎

日常の延長で道路を「使ってみる」

2017年度の社会実験「MeguruQuruwa」では、連尺通りの歩道と車道を使って、飲食や物販のお店を出したり、テーブルや椅子を置いて休憩スペースを設けることで、まちに活気が生まれ回遊性が高まることが検証されました。次なる課題は、そうした道路活用を持続させるために、沿道の商店や生活する人にとって無理のない形で使いこなす仕組みを見出すことでした。

そこで、歩道のうち、通行用に2m確保した上で、建物に面した軒先1mと車道側の0.5mを対象範囲として、約3週間にわたり日常の暮らしや商売の延長で試験的に歩道空間を使ってみる「生活社会実験」を行うこととなりました。

連尺通発展会と株式会社三河家守舎が中心となり道路活用の勉強会や社会実験の計画づくりと実践を担い、NPO法人岡崎まち育てセンター・りたが主催となり各機関との調整役を務めました。なお、社会実験にかかる費用は国土交通省の「民間まちづくり活動促進事業」の支援を受けています。

「暮らし」が通りににじみ出す

通常の社会実験では、設置する位置とものを事前に決めて申請することが一般的ですが、本社会実験ではあらかじめ考えうる最大限の使用パターンを申請しておくことで、沿道の商店や生活する人が主体的にいろいろな使い方を試せる自由度を担保したことが特徴と言えます。

社会実験開始時は、活用可能な範囲を示す白線が引かれ、いくつかのベンチ、テーブル、椅子が置かれただけでしたが、特筆すべきは、社会実験担当者が期間中路上に常駐し、道行く人に社会実験の趣旨を説明したり、意見を聴いたり、使われ方を観察し、それらの記録や情報を発信したことでした。

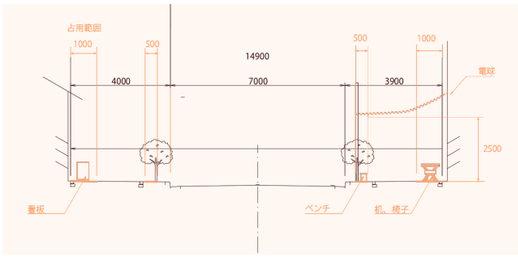
そうすることで、徐々に沿道の商店が看板を設置したり、軒先販売を行ったり、置いたベンチをより適した場所に動かして座ったり、食事をしたりするようになり、暮らしの一部が通りににじみ出た風景が現れはじめました。

通りを使うことを未来の日常へ

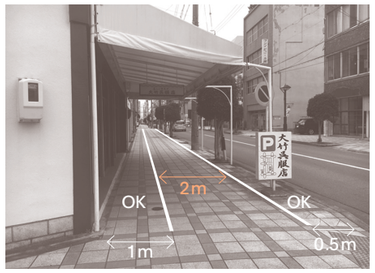
社会実験は、未来の日常を目指して行われるため、現状維持を望む人と変化を望む人の利害調整が不可欠です。同時に、QURUWA戦略に位置づけられた連尺通りに期待される役割と、地域の人がどのように暮らしたいか、どのような未来を描くのかをすり合わせることも重要です。その意味では今回の社会実験を行う過程において、地域の人自らが通りの使い方をさまざまに試し、通りの使い方が暮らしを豊かにすることにつながると実感したことは重要な一歩と言えるでしょう。そうした関係者の意識醸成を図る上では、公共の場に常駐し、場所の使われ方を観察し、日常的な交流の中で情報を受発信し、緩やかに自発的な活用を促す「世話人」的な存在が重要な役割を果たしていました。

今回の社会実験を経て、地域の人自身による持続的な活用の可能性が見えました。QURUWA戦略と関係者の意向を踏まえ、まちの将来の日常を落とし込んだビジョンとしてのストリートデザインを描くことが次のステップとなります。

連尺通り社会実験｜実施場所



連尺通り社会実験｜横断図



歩道活用の対象範囲

通りの使われ方を観察、記録し、発信・啓発

地域の方向けに「おたより」を作成し、回覧板等で情報共有

SOCIAL EXPERIMENT

お昼ご飯を食べる人たち

空地に仮設のスナックが出店し、路上で一献

通りで打ち合わせをする人たち

通学路に置かれたおもちゃに足を止める
下校途中の小学生

人工芝を敷いたところで遊ぶ親子

沿道の方が自発的に設置したベンチ

軒先で販売する呉服屋さん

近所の総菜屋がリアカーで行商する姿も

沿道の方が友人を誘って路上でモーニング

社会実験

おとがワ!ンダーランド

乙川の河川空間では、民間事業者が収益事業を実施することが可能となる「かわまちづくり支援制度」を活用し、2016年より水辺の豊かな使い方を模索する社会実験「おとがワ!ンダーランド」が実施されています。3年目となる2018年度は、民間主体の「おとがワ!活用実行委員会」が設立され、おとがワ!ンダーランドの運営はじめ、殿橋テラスの運営補助、かわまちづくりの情報発信等が行われました。

3年の蓄積と新たな気づき

乙川河川敷は、河川空間である以上、水位の上昇により使えなくなることはもちろんのこと、音響機器を使った音出し、宿泊、火気使用など、法制度に基づく制約や近隣住民への配慮が必要となります。これまでの2年間、乙川河川敷でさまざまな使い方を試す中で、そうしたルールと、どのようにしたらルールを守りながらやりたいことが実現できるかのノウハウが蓄積されてきました。

乙川の流水は、春から秋にかけては農業用水として利用されるため、堰を閉めて水位が上げられており、それによって観光船やSUPなどの水上プログラムが可能となります。そのため、社会実験開始当初は、水位が高い時期を河川活用の「オンシーズン」として活用が促進されてきました。

しかし、通年で河川占用が可能となった3年目は、水位が下がる秋以降、キャンプや子ども遊びプログラム、定期的なランニングといったさまざまなプログラムが行われ、「オフシーズン」と認識していた時期にも適した使い方があることがわかりました。

水位が高い時期は、堰で水の流れが止まることで水質が悪くなる傾向にありますが、水位が下がる時期は常時流れがあるため、川の水の透明度が上がり、小さな魚など水中の生物も見られるようになります。また砂が堆積した部分が露出し、子どもにとっては格好の遊び場になるという発見もありました。

こうした乙川ならではの特性や魅力が把握されてきたことで、実行委員会はプログラムの実施者と共に乙川ならではの使い方を見つけていくことが可能になり、結果的にプログラムの魅力が高まり、おとがワ!ンダーランド全体の集客や売上の向上につながったと言えます。

おとがわエリアビジョン

おとがわエリアビジョン（QURUWA戦略における乙川エリアの詳細ビジョン）は、地域・民間・行政でエリアの将来像と短・中・長期で展開するプロジェクト・活用のイメージを共有するために2018年3月に策定されました。エリアビジョンの内容は、地域の合意をとりながら、地域は暮らしに、民間は自らの事業に、行政は計画に反映していきます。目指す姿を明確にすることで、良質な民間事業者を呼び込むことも目的にしています。

また、エリアビジョンは事業主体・事業内容の変更による更新を前提としており、柔軟に運用されています。

3年間の実績表

	2016年度	2017年度	2018年度
実施期間	7月19日−9月4日（48日）	7月20日−1月31日（196日）	6月1日−3月31日（304日）
実施団体数	32団体	24団体（新規団体：13）	23団体（新規団体：10）
プログラム数	34	41	39
実施日数	27日	54日（うち6日は中止）	64日（うち8日は中止・延期）
総来場者数	3,401人	3,844人	約7,090人
売上	2,205,310円	2,440,034円	5,419,250円

おとがわエリアビジョン

春の観光船運行（岡崎城下舟あそび）
実施日：3/29−4/11

殿橋テラス（Parlor Newport Beach）
実施日：7/6−11/25

乙川ナイトマーケット（乙川ナイトマーケット実行委員会）
実施日：毎月第4土曜日

新鮮野菜の朝市販売（NPO法人おかざき農遊会）
実施日：毎月第1・第3土曜日

フライキャスティングフェスティバル（Kencube）
実施日：10/28

HANDMADE SELECT MARKET（ハセマ実行委員会）
実施日：6/10、11/4、12/16

おとがワ！星空観望会（岡崎星とあそぶ会）
実施日：毎月第3土曜日

SAKURA SUP FESTVAL2018
（waileo SUP school & tours）｜実施日：4/1

おとがワ！流星群キャンプ（おとがワ！活用実行委員会）
実施日：10/20、10/21

自転車試乗会（サイクルぴっとイノウエ）
実施日：6/9、6/10

QURUWA RUN（QURUWA RUN実行委員会）
実施日：毎月第1・第3土曜日

川辺でくつろぐ椅子づくり（岡崎製材（株））
実施日：11/4

水位が下がった乙川で遊ぶ子どもたち

水上から眺める乙川の朝焼け

SOCIAL EXPERIMENT

社会実験

岡崎泰平の祈り

開催：2018年11月24日［土］
放流数：20,000個
来場者数：35,000名
主催：岡崎泰平の祈り実行委員会

春の桜、夏の花火に並ぶ、乙川の冬の風物詩となる景色をつくりだそうと始まった「泰平の祈り」も今年で4回目。約80社の協賛と多くの実行委員の手によって、青く光るLEDの球「いのり星®」20,000個で乙川の水面が埋め尽くされ、過去最高となる35,000名の来場者の目を楽しませていました。毎年恒例のナイトマーケットに加え、今年度より近隣の小学生がつくった三角灯篭が河川敷を彩り、親子連れの姿も例年以上に多く見られました。

乙川リバーフロント QURUWAシンポジウム

動き出した、QURUWA

10月から11月にかけて行われた康生通り、連尺通りの社会実験をはじめ、QURUWA戦略が策定されてから1年間の公民さまざまな動きの発表を通じて、QURUWA戦略の全体像を見渡したのち、名古屋市栄ミナミ地区の事例紹介を踏まえ、これからのQURUWAのまちづくりの将来像やそれらを実現する方法について掘り下げました。

パネリスト

清水義次 | Yoshitsugu Shimizu
乙川リバーフロント地区 まちづくりデザインアドバイザー／建築・都市・地域再生プロデューサー／アフタヌーンソサエティ代表／3331 アーツ千代田代表

西村浩 | Hiroshi Nishimura
乙川リバーフロント地区 まちづくりデザインアドバイザー／建築家／株式会社ワークヴィジョンズ代表取締役／株式会社リノベリングパートナー

泉英明 | Hideaki Izumi
乙川リバーフロント地区 まちづくりデザインアドバイザー／都市プランナー／有限会社ハートビートプラン代表取締役／北浜水辺協議会理事

伊藤孝紀 | Takanori Itoh
名古屋工業大学大学院 建築・デザイン分野 准教授／建築家／タイプ・エービー主宰／栄ミナミまちづくり会社（都市再生推進法人）顧問

コーディネーター

藤村龍至 | Ryuji Fujimura
乙川リバーフロント地区 まちづくりデザインアドバイザー／東京藝術大学美術学部建築科准教授／RFA主宰

日時：2019年2月17日［日］14:00-16:30
会場：岡崎市図書館交流プラザ りぶらホール

栄ミナミの エリアマネジメントに学ぶ

伊藤｜栄ミナミ地区では、2016年に14の町内会と5つの商店街、3つのまちづくり組織が一体となってまちづくり会社をつくり、2018年、都市再生推進法人に指定されました。栄ミナミ地区の「く」の字に曲がった街区の形をモチーフにして、ロゴマークをつくったり、それを街路灯やベンチ、サイクルポートのデザインに取り入れ、統一的なエリアのイメージづくりを図っています。プリンセス大通や南伊勢町通など、地区内の通りの個性を読み解いてターゲットを定め将来イメージを描いていますが、それと同時にゴミ収集や荷捌きスペース確保、放置自転車などの地域課題の解決も図っています。

活動の発端は、2013年、自分たちでやれることから始めようと、商店街が所有・管理する街路灯を1本変えたことです。そうした小さな成功体験が波及していって、今では150本の街路灯が同じデザインに変わり、このエリアのシンボルになりました。

2016年からは、歩いて楽しいにぎわいづくりと収益性を検証するため、①デジタルサイネージ、②有料駐輪場、③シェアサイクルの3つの社会実験を行っています。また、老朽化した道路上の装飾アーチを広告塔にしたり、パークレットの一部を広告掲出スペースにして収益を得て、桜並木整備の資金に充て、地区の魅力を高めて集客力を向上し、さらに広告の価値も上げるという循環を目指しています。

泉｜グランフロント大阪のような大きなデベロッパーが行うエリアマネジメントと比べて、栄ミナミではもともと自治会や商店街が取り組んできた地域課題の解決を担っているのが特徴的だと感じます。自治会・商店街ベースのエリマネは、都市再生推進法人として収益性を確保するというよりは、推進法人としてエリアの価値を高める取り組みを行い、本業（＝商業）で回収するという構図が適しているのかもしれません。

清水｜栄ミナミの動きは、商業で回収というばかりでなく、不動産ベースでも見ることができます。私がこのエリアのプロジェクトに関わっていたころ、大津通は家賃がまだ低かったんですが、1件のビル再生の一環でAppleストアをテナントに入れたところ、不動産価値が一気に高まりました。不動産オーナーたちは、さらにエリアに波及させるために大津通のホコ天を仕掛けようとなり、栄ミナミ音楽祭などの動きにつながったんだと思います。1件のビル再生でもインパクトは生まれますが、さらに面的にエリアを立て直すには、どんな仕掛けをするのが効果的か、QURUWAエリアの再生戦略を立てることが大事です。エリア内の都市的な活動が活発になってくると地価が上がっていく。それが固定資産税の増収につながり、エリア内の公共空間再整備費約100億円の投資の元が取れる流れが生まれてきます。

みんなで都市を経営する

西村｜結局今一番重要なのは「都市経営」という視点だと思います。都市再生推進法人は、健全な都市経営を実現するために多くの企業や市民に参加してくださいという仕組みなんだと思います。岡崎市全体でいかに稼ぐかということを一市民も参加して考え、結果として市全体の収益を上げる。あがった収益がまた社会に分配される、という循環を生むことが大事なんではないでしょうか。

エリア全体に広がったオリジナルデザインの街路灯（南伊勢町通り）

老朽化した道路上の装飾アーチを収益の生まれる広告塔としてリニューアル（プリンセス大通り）

SYMPOSIUM

藤村龍至氏

伊藤孝紀氏

清水義次氏

泉英明氏

西村浩氏

泉｜ニューヨークでは、民間が「コンサーバンシー」という形態で公園の管理運営をしています。日本では公共空間の管理は、行政の直営か指定管理か、0か100かという選択肢しかありませんが、6:4とか7:3とか割合を柔軟に考えて、その中で資金集めから施設や空間の活用、募集したボランティアによる維持管理などを担うことで、市民、事業者の幅広い活躍の場が生まれています。

清水｜まち全体で稼ぐという考え方をベースにすると、城下町のQURUWAエリアだけで考えるのではなくて、額田の山間部などの地域資源も含めるとまた違った捉え方ができるのではないでしょうか。

エリアマネジメントとか都市再生推進法人とか、流行言葉のように全国に広まっていますが、魔法の杖のようにこれを一振りすればまちがよくなるというものではありません。名古屋の事例が示すように、いろいろな取り組みの地道な積み重ねと年数をかけてできるものだということを認識する必要があります。

自然、歴史や人的な資源も含めて岡崎らしい個性を活かすのが大切です。

公共空間の「丁寧な世話人」

泉｜康生通り、連尺通り、乙川の河川空間の社会実験を通じて、これまでなかった市民活動の普段使いが増えてきている印象を受けました。水都大阪でも、公共空間を使おうにも最初はすぐに収益につながらないから商業者は入ってこないので、収益を目的としない市民活動やアクティビティを誘致することに力を入れました。そうした人たちをうまくバックアップする「丁寧な世話人」がいると魅力的なアクティビティが増えていって、そこでようやく民間事業者が投資するステップにつながります。

20年後の「普通」を 今からつくる

西村｜都市再生とかエリアマネジメントというと「お金を稼ぐ」ということにフォーカスされがちですが、アメリカのブライアントパークではボランティアの手で維持管理されていて、ボランティアが順番待ちになっているくらいです。そういう維持費の減らし方もありますが、日本ではなかなかそうはならない。そこにはボランティア教育の違いがある。人口減少という誰も経験したことのない状況の中で、今まで当たり前と思ってきたことをもう一度見つめ直してみましょうというのがQURUWA戦略なんだと思います。今から変えていけば、20年後には、地域の人が公共空間を、行政任せにせず自分たちで運営するというのが普通の社会になる。そこに向かうことを目指してまちのリノベーションをしていくといいのではないでしょうか。

QURUWAに生まれた公民連携や民間の動き

康生通り「グッとくるわ社会実験」

日時：2018年11月12日[月]–18日[日]
主催：岡崎市乙川リバーフロント推進課
企画・運営：株式会社まちづくり岡崎

暮らしの木質化

木工職人としての技術とまちで出会った人のつながりを活かし、岡崎産木材を使用した「暮らしの木質化」を啓発。

連尺通り「生活社会実験」

日時：2018年10月26日[金]–11月18日[日]
主催・運営：NPO法人岡崎まち育てセンター・りた
協力：連尺発展会、株式会社三河家守舎

岡崎城下舟あそび

乙川の春と夏の風物詩となっている観光船。桜や夕焼け、シラサギの群れなど、季節や時間帯によって異なる楽しみ方や魅力が満載。

乙川リバークリーン

実施日：毎月第2土曜日
主催：おとがワ!活用実行委員会

乙川を使う人有志で行う河川清掃。子どもたちの参加によりゴミ拾いが宝探しを楽しむように行われている。

りぶらと遊ぼうプロジェクト

りぶらに訪れる親子向けに、周辺の伊賀川や芝生広場、岡崎公園などの楽しみ方を紹介するMAPを自主制作。

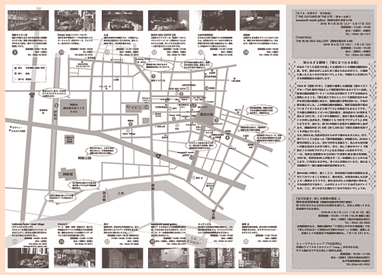
おとがワ！星空観望会

実施日：5–11月の第3土曜日開催
主催：岡崎星とあそぶ会

まちなかにありながら空が広くひらけた乙川河川敷で、背丈ほどもある天体望遠鏡で四季折々の星を紹介する。

未知とアンテナ

岡崎愛があふれる女性2人が自主発行した、人の顔が見える「まちの楽しみ方」を紹介するまち歩きMAP。SNSでの発信やツアーも開催。



HANDMADE SELECT MARKET

実施日：2018年6月10日[日]、11月4日[日]、12月16日[日]
主催：ハセマ実行委員会

乙川の水辺で過ごす豊かな時間を演出する、選りすぐりのクラフト雑貨や食べ物が集まるマルシェ。

コネクトスポット

ひきこもりや不登校の人を支えるNPOが運営。りぶらのOKa-Bizと市民活動センター、シェアオフィスosotoなど、QURUWA内のリソースを最大限生かし2018年4月起業。

ワークショップ

籠田公園の使い方や関わり方を考えるワークショップ

2019年7月の籠田公園リニューアルオープンを見据えて、地域にお住まいの方々や公園で活動をしたいという方々と、公園の柔軟な使い方、公園のあり方、管理への関わり方などを話しあうワークショップを3回行いました。

第1回
新しい籠田公園で何をする？

日時：2018年10月18日[木]｜場所：興蓮寺（亀井町）

第1回は、新しい籠田公園がどのような場所になるのか改めて共有し、これから籠田公園を運営していくうえで参考となる他地域の2つの公園の事例が紹介されました。その後、参加いただいた地域の方々が新しい籠田公園とこれからどのように関わっていくか、何を大切にしていきたいかなどをグループに分かれて話し合いました。

［**話し合いのまとめ**］

活力あふれるお祭りを核に、
地域のつながりを高める使い方を大切にしよう！

籠田公園近隣の5町内で合同の盆踊りを開催するなど、町内の枠を超えた住民交流の場として活用する。

「ゴミが落ちていない綺麗な公園の維持」と「住民同士のつながりづくり」をつなごう！

月1回の「お掃除の日」をつくるなど、地道な活動を通じて人々が出会う交流場として活用する。

多様な世代の視点から使い方を考えて
公園を管理運営する仕組みを考えよう！

子どもの自転車練習、高齢者のペット連れ等を受け入れる方法を考える。

第2回
籠田公園の活用アイデアを出し合おう！

日時：2018年12月20日[木]
場所：興蓮寺（亀井町）

第2回は、はじめに籠田公園周辺の人口推移と今後起こりうる地域課題について情報共有しました。続いて、そうした課題の解決策と籠田公園の活用方法について、3つのグループに分かれて話し合いました。その結果、籠田公園の日常的な使い方を考える上で、「定期的に清掃やラジオ体操などを行いたい」という意見が全てのグループからあがりました。また、事業者や近隣の大学等と連携し、より人が集まるように魅力的な催しを行いたいというアイデアも出されました。一方で、それらを実現するためには、間に立って支援する役割が必要だという指摘がありました。

［**話し合いのまとめ**］

気軽に参加できる催しを
定期的にやっていこう！

籠田公園周辺では急激な高齢化が進んでいるので、孤立を防ぎ、住民同士のつながりをつくるような気軽に参加できる定期的な催しとして清掃やラジオ体操などを行う。

事業者や大学とも連携して魅力的な
プログラム開発を進めていこう！

デイサービスをやっている事業者と連携し「アウトドアデイサービス」や、大学等と連携して、異なる世代で交流するイベント等を企画・実施する。

地域の人の思いを実現するための
話し合いの場について考えよう！

盆踊りや、花火の持ち寄り、芋煮会などをやりたい住民の思いを受け止めて、実現する動きをサポートする人や仕組みが必要。

第3回
籠田公園の活用イメージを共有しよう！

日時：2019年1月31日[木]
場所：岡崎市民会館大会議室

第3回は、地域住民に加え、これまでQURUWAプロジェクトに関わりのあった人の中から、地域の垣根を越えて籠田公園を活用したいと考える民間事業者も参加しました。
第2回のWSの話し合いで出たアイデアから見えてきた「A.定期的な活用」「B.町内連合イベント」「C.自主企画イベント」という3つのテーマごとにグループに分かれ、どのように運営を進めていくかが話し合われました。今回の話し合いで清掃活動などの定期的な取り組みや、5つの町内会が連合した盆踊り大会実施に向けた動きが生まれたほか、地区外の方々が行うイベントについて事前に地域の住民に情報を共有することの重要性も指摘されました。

［**話し合いのまとめ**］

A.定期的な活用「住民相互の
ゆるやかなつながりをつくる清掃活動」

無理なくできる人、やりたい人が参加する定期的な清掃活動を行い、終了後に交流の場を設けてゆるやかなつながりを育んでいく。

B.町内連合イベント「町内合同盆踊り大会」

住民同士の結束を高めるために、かつて行われていた盆踊りを複数の町内会合同で復活させる。

C.自主企画イベント

清掃などの活動時の憩いを提供し、収益は芝生管理に還元する「ミソスープスタンド」

絵本をリサイクルすると同時に子育てママの居場所となる「りんご箱文庫」

健康体操やグランドゴルフなどシニアが公園に来るきっかけをつくる「地域包括ケア」

お弁当を食べながら世代を超えて親睦・交流する「ランチ会」

今後の動き｜今後、ワークショップで出された意見をどのように反映させていくか、また使い方のアイデアをどう実現していくかを継続して話し合う場を持ち、籠田公園等の活用や管理について話し合う協議会の立ち上げを検討していきます。

WORKSHOP

プロジェクトレポート

「橋の名称」と「通りの愛称」公募

主要回遊動線QURUWAの南北をつなぐ(仮称)乙川人道橋の「橋の名称」と籠田公園から乙川人道橋までの「通りの愛称」が、公募により、それぞれ「桜城橋(さくらのしろばし)」、「天下の道(てんかのみち)」に決まりました。

名称公募のプロセス

市内の中学校生徒会が岡崎市と市議会に対し提案・質問をする「生徒市議会」で出された「乙川リバーフロント計画に対して中学生の目線で考えたことを取り入れて欲しい」という意見に応える形で公募が行われ、5つの中学校の生徒15名が選定委員に加わりました。

2018年8月から約2ヶ月間、市内の地域交流センター等8か所で橋や通りの完成イメージ図や模型、映像などを展示し、案が募られ、「橋の名称」4,004件、「通りの愛称」3,834件という想像をはるかに上回る応募が集まりました。

この大量の案の中から選定委員によりそれぞれ12案が選ばれ、そこからさらに委員の投票により5案に絞り込まれました。

各5案に対し、市民投票が実施され、「橋の名称」7,650票、「通りの愛称」7,585票から、最多の票を獲得した各1点が選ばれることとなりました。

「橋の名称」投票候補
- 桜城橋
- 姫橋
- 見城大橋
- WATARIN
- QURUWA橋

「通りの愛称」投票候補
- 天下の道
- 泰平通り
- 岡崎めぐりん通り
- QURUWAストリート
- みりん通り

模型展示の様子

授賞式の様子

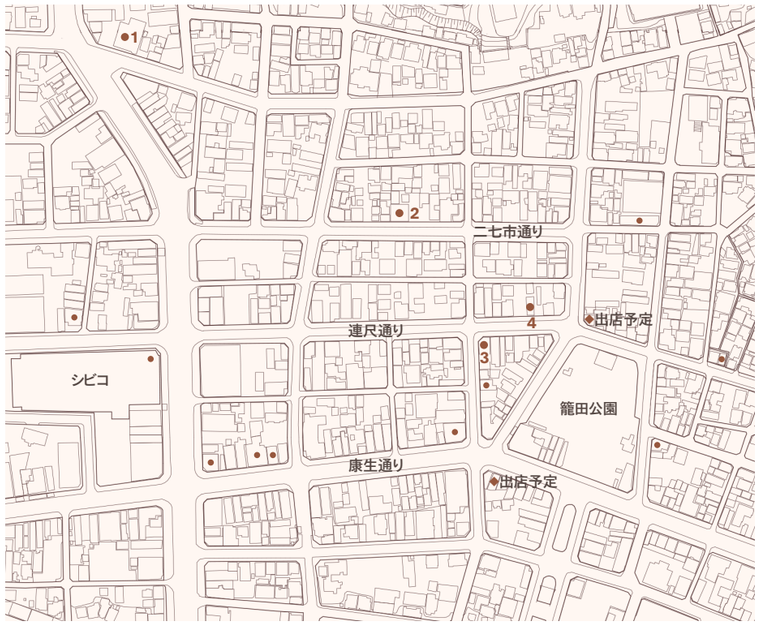
関連プロジェクト

リノベーションまちづくり

H29年度
- 空き物件ツアー
- まちなか談話
- リノベーションスクール
- リノベビジネス開拓会議

H30年度
- マッチング事業
- モデル事業の伴走支援
- 家守の育成と発掘
- 不動産・建築士向け勉強会の開催
- 女性の起業支援・講演会の実施
- 啓発資料の作成
- 空き物件ツアー

遊休不動産を活用し、都市経営課題を踏まえて敷地単体ではなくエリアの価値を高めるコンテンツの創出を促進するリノベーションまちづくり。2016年に策定された「岡崎家守構想」により、籠田公園周辺がリノベーションまちづくりを推進する「スモールエリア」として設定され、これまでに3回の「リノベーションスクール」が開催されました。リノベーションまちづくりで紹介した物件やスクール参加者等による出店により、エリアの変化が目に見える形になってきています。



● リノベーションまちづくりによる出店実績例

1 | osoto（シェアオフィス）

2 | wagamama house（飲食他）

3 | 一隆堂喫茶室（カフェ）

4 | at the table・銀界拉麺（飲食他）

REPORT

会議

デザイン会議

QURUWAプロジェクトへの提案・助言・評価とともに、
公民連携と都市デザインのクオリティコントロールを行うため、
まちづくり専門家と主要まちづくり4部局等から構成された戦略会議体

●メンバー

[乙川リバーフロント地区まちづくりデザインアドバイザー]

清水義次 | アフタヌーンソサエティ代表
藤村龍至 | 東京藝術大学准教授
西村浩 | 株式会社ワークヴィジョンズ代表取締役
泉英明 | 有限会社ハートビートプラン代表取締役

[民間事業者]

[岡崎市職員]

●第1回

日時：2018年7月18日[火]14:00-16:00
場所：岡崎市役所分館3階会議室
内容：

- **情報発信について**
  QURUWA戦略を実現するために、呼び込みたい民間事業者像について具体的にイメージし、そうしたターゲットに向けてどのように情報発信をすべきかについて議論しました。
- **QURUWA全体の公共空間の運営、利活用、維持管理の基本的な考え方について**
  どのように公共空間の利活用と維持管理のコストを下げながら、豊かな使い方が実現できるか意見交換し、拠点事業者のエリアマネジメントへの関わり方や、収益化ができそうな公共空間と市直営の管理が必要な公共空間の仕分けの必要性などについて議論しました。
- **駐車場について**
  QURUWA周辺の駐車場の集約化とシェアサイクルとの連動性を検討する必要性が指摘されました。

●第2回

日時：2018年10月11日[火]14:00-16:00
場所：岡崎市役所分館3階会議室
内容：

- **康生通り社会実験について**
  次年度以降につながる道路活用の方向性や駐車場の有効活用の考え方、社会実験中の戦略的なアンケートの取り方や将来のイメージの提示などについて提案されました。
- **太陽の城跡地について**
  リバーベースの具体的な機能および整備や運営のあり方について、想定しうるパターンからサウンディングも踏まえて方針検討を進めることを確認しました。
- **りぶら前セントラルパーク構想について**
  総合計画に位置付けられている「セントラルパーク構想」の実現に向けたプロセスの整理と、周辺の交通計画の再編についての検討の進め方などについて議論しました。
- **Park-PFIについて(かわしん跡地、(仮称)乙川人道橋)**
  サウンディングに参加した事業者に対してQURUWA全体の動きを伝える情報提供の必要性の指摘や、景観ガイドラインの策定に先行して事業者選定がされる場合、専門家の意見を踏まえて景観・デザインを調整する仕組みについて提案がありました。
- **リノベーションまちづくりについて**
  専門家からコンテンツの質や継続性を維持していくことの必要性が指摘され、市からは創業や出店希望者のフォローアップの体制構築について情報提供が行われました。

●第3回

日時：2019年2月5日[火]14:00-16:00
場所：岡崎市役所西庁舎701会議室
内容：

- **QURUWA戦略の今後について**
  各地の都市再生推進法人の事例や実情を踏まえた岡崎ならではの役割や、既存の名所旧跡だけでなくQURUWA戦略により生まれるまちのコンテンツと暮らし自体が観光資源となる新しいツーリズムのあり方について議論しました。
- **景観まちづくりについて**
  敷地単体ではなくエリアで景観を考えることが不動産価値の向上につながることの啓発と実際に景観・デザインを調整するためのデザインレビューの仕組みについて提案されました。

CONFERENCE

PROJECT TIMELINE

プロジェクトのタイムライン

平成25年度
2013
- 岡崎活性化本部による乙川リバーフロント地区基本方針策定のための提言書発表
- 岡崎市による乙川リバーフロント地区整備基本方針策定

平成26年度
2014
- 乙川リバーフロント地区整備基本計画策定

平成27年度
2015
- おとがわプロジェクト 発足
  *おとがわプロジェクトとは…
  乙川リバーフロント地区整備計画の別称
- キックオフフォーラム開催
- 第1回シンポジウム開催
- デザインシャレット実施
  [パブリックミーティング2回]
- シャレット展示会開催
- おとがわキャラバン in 市役所 開催
- 第2回シンポジウム開催
- おとがわキャラバン in 籠田 開催
- 中間提言発表
- まちづくりワークショップ[1] 開催
- おとがわキャラバン in りぶら 開催
- おとがわキャラバン in 中央緑道 開催
- まちづくりワークショップ[2] 開催
- まちづくりワークショップ[3] 開催
- グランドデザインフォーラム開催・
  [基本構想][市民提案]
- グランドデザイン展示会開催

平成28年度
2016
- 基本構想[市民提案]に対する市の対応方針
- おとがワ!ンダーランド
- デザイン会議スタート
- QURUWA FUTURE VISION
- QURUWA パブリックミーティング
- エリア再生連続シンポジウム
- まちのトレジャーハンティング@岡崎
- まちなか未来戦略フォーラム

平成29年度
2017
- おとがワ!ンダーランド
- QURUWA FUTURE VISION
- 公共空間活用の担い手育成ワークショップ
- 乙川リバーフロントフォーラム
- 情報拠点設置
- 社会実験「MeguruQuruwa」
- 公共空間活用
- 乙川リバーフロントフォーラム
- 乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画
  [=QURUWA 戦略]とりまとめ

Vol.1 → Vol.2 → Vol.3 → Vol.4 → Vol.5 → Vol.6

平成30年度
2018
- 4
- 5
- 6 [QURUWAプロジェクト4] おとがワ!ンダーランド
- 7
- 8
- 9
- 乙川リバーフロントQURUWA シンポジウム「暮らしを豊かにするまちの使い方最前線」
- 10
- [QURUWAプロジェクト5] 第1回籠田公園 地域住民ワークショップ
- 11
- [QURUWAプロジェクト7] 連尺通り「生活社会実験」
- [QURUWAプロジェクト7] 康生通り「グッとくるわ社会実験」
- 12
- [QURUWAプロジェクト5] 第2回籠田公園 地域住民ワークショップ

2019
- 1
- [QURUWAプロジェクト5] 第3回籠田公園 地域住民ワークショップ
- 2
- 乙川リバーフロントQURUWA シンポジウム「動き出した、QURUWA」
- 3
- [QURUWAプロジェクト2] 橋の名称と通りの愛称決定
- 4

BACK NUMBER

Vol.1
キックオフフォーラム
シンポジウム
デザインシャレット
中間提言書
[収録]

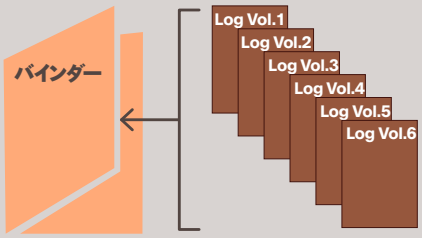
Vol.2
キックオフフォーラム
シンポジウム
デザインシャレット
中間提言書
[収録]

Vol.3
おとがわプロジェクトの全体像
グランドデザインフォーラム
市民インタビュー
[収録]

Vol.4
おとがわプロジェクトの全体像｜リノベーションまちづくり｜かわまちづくり｜基本設計ワークショップ｜シンポジウム｜まちのトレジャーハンティング｜フォーラム｜パブリックミーティング｜3つの会議
[収録]

Vol.5
[特集]
QURUWA 戦略
乙川リバーフロント地区の
まちづくり3年目の取り組み
[収録]

『OTOGAWA GRAND DESIGN Log』
本冊子は、配布するバインダーに挟み、
各号をまとめて保管下さい。



発行元	岡崎市
発行日	2020年3月
企画・編集	NPO法人岡崎まち育てセンター・りた
デザイン	刈谷悠三+角田奈央+平川響子/neucitora
写真	奇天烈写真館、前田智恵美、NPO法人岡崎まち育てセンター・りた

問い合わせ先:
岡崎市都市施設課 QURUWA戦略係
tel: 0564-23-7421
mail: quruwa@city.okazaki.lg.jp
web: https://quruwa.jp